

Maugham の 精 神 的 探 求

「The Razor's Edge」論

田 中 正 志

(一)

Somerset Maugham の作家的基盤が人間への興味にあることは彼の処女作 *Liza of Lambeth* から、すべての彼の作品の中に貫流しているのであるが、二つの大戦中の動きも人間探求という大きなテーマの中で大変興味深い。

第一次大戦では軍医勤務から諜報関係の仕事にまわされ、ジュネーヴを中心に活躍し、その経験をもとにして *Ashendon* が書かれ、第二次大戦では65才の老齢にもかかわらず、イギリス政府から情報、宣伝の仕事を委嘱され、西部戦線で活躍、その後、アメリカに渡り英米間の連繋に文化、宣伝関係の仕事をしている。

Maugham はその後、そのまま戦火を避けて、アメリカに滞在することになり、1942年頃から長篇小説の執筆にかかり、1944年、Maugham 70才の年に *The Razor's Edge* が発表されたのである。まさに、晩年期を代表する作品である。

1942年から1944年はアメリカもすでに参戦国で、ヨーロッパに、太平洋に、国を挙げての戦争遂行中であつた。

この作品がアメリカの若い青年たちの間に驚異的な反響を呼んだのはたくましい青年たちの貴い生命が海に、陸に、空に、虚しく消えていた、まさにその時期に Maugham はこの作品の主人公が一戦友の死に触発されて、やがて、世俗世界に背いて、死と生、善と悪、正と不正、等々といった人間性根源の問題

の探求に投入していく様の創造に全力を傾注しているからであろう。

舞台は第一次大戦にとられているが、いまや第二次大戦という同じ戦争という運命の中に生きることを強いられていたアメリカの青年たちが、主人公の生き方に身をつまされ、この根源的問題に動かされたことは容易に理解できる。

(二)

Maugham の技法の一つとして有名な一人称「わたし」がこの作品の語り手として登場。勿論、「わたし」とは Maugham 自身であるが、この作品の中では登場人物として「モーム」という名の小説家として登場。

第一次大戦後の1919年、小説家「モーム」は若輩で無名であった頃、アメリカで Elliott Templeton と知己になった。彼は美術絵画に関する鑑賞眼をもち、上流社交界の間で美術品の売買で財をなした人間で、上流社交界での地位を得ることを念願としている俗物である。

「わたし」が第一次大戦後、シカゴに滞在中、パリから帰国中の彼から妹の家でのパーティーに招かれる。彼の妹 Louisa Bradley は外交官の未亡人で二人の息子を海外に送り出し、今では Isabel という娘と暮らしている。このパーティーで彼らの他に Laurence Darrell (通称 Larry) と Gray Maturin という青年、Sophie Macdonald という若い娘との出会いがある。Isabel は若くて美しい女性で Larry と婚約中である。Soplie は Isabel の友人でおとなしい内気な娘。

この作品の主人公 Larry は物静かで、背が高く、誰からも好かれる青年だったが、第一次大戦後に復員して人が変わったようになった。

Larry は年齢を偽って航空隊員として、ヨーロッパの空で戦い、復員後は故郷に戻っても職にもつかず、大学にも入学しようとしぬ。彼は航空隊員として交戦中に自分を援助した戦友を失い、また、大空に浮かんでいる時、無限の世界と一体感をおぼえる。こうした体験が Larry を人生の懐疑の世界に導いていく。

Isabel は Larry に対して堅実な生活設計を立てて、二人が結婚することを願

っているが、彼らの共通の友人、Gray Maturin が父親の経営する証券会社に仕事を紹介したにもかかわらず、彼はこれすら断ってパリに行く。

パリには Larry が求めている何物かがつかめると思い恋人 Isabel を振り切って、繁栄の道を通り走っている物質社会のアメリカを脱出していく。アパートに住み、図書館に通いつづけ、もっぱら、読書三昧で精神の世界をさまよう日々が続き、社交界で活躍している Elliott や恋人の Isabel にとっては Larry は人生の脱落者として映るのは無理のないことである。質素であるが精神的に豊かな生活をと願う Larry と物質的豊さを求める Isabel との人生観の違いは当然のように二人の婚約解消という結論となる。

Isabel はアメリカの物質社会の象徴のような青年実業家になっている Gray Maturin と結婚し二児の母となる。

1902年、アメリカの株式市場の大暴落で Gray は破産するが Elliott は Gray Maturin 夫婦を引きとり、パリの自分の家に住ませる。

Gray は破産後、激しい頭痛に苦しみ廃人同様の身になっていたのである。

モームはパリで偶然にも Larry に出会う。Gray Maturin 夫妻がパリに滞在していることを知らされ、彼らの住いを訪れた Larry は Gray の頭痛を奇妙な暗示の力でその病を治してしまう。

Larry は世界を転々と放浪し、多くの思想、宗教に出合いつつ、インドで聖者と生活を共にし、会得した神秘なる力を身につけたのである。一変した Larry はシカゴ出身の Soplhie Macdonald がアメリカで夫と子供を交通事故で失い、精神的にくずれ、酒と麻薬で身をくずしているのを救済し、更生させ、さらに彼女と結婚することを決意するが嫉妬する Isabel の計略にはまり、また酒びたりになり、行方をくらまし、ついには、死体となって発見される。

「わたし」はやがて Elliott の重態の報に接し南仏リヴィエラの彼の別荘にかけつけると、生死の境をさまよいつつも、彼は社交界への夢は捨てきれず、高貴な方からの招待状を手にして、虚飾の人生を終える。

Elliott が死亡して二ヶ月ほど経ったころ、「わたし」は英国へ帰る途中、一週間ばかりパリに滞在しているときに偶然 Larry に出会い、彼の放浪の旅に

ついて聞く。

Isabel と別れて、Larry はパリから北フランスの炭鉱で働いた後、ベルギーからドイツに入りボンで勉強し続ける。ここで知り合いになった Ensheim 神父にカトリックの古い教会は Larry の疑問について昔から考えているので、彼の修道院に来るように説得され、三ヶ月ほど修道院生活を送る。しかし、何故、絶体者なる神がこの世に悪をつくって無力な人間を苦しめるのかという Larry の根本的な疑問に答えることはできなかった。Larry は再度、パリに帰り、それから、スペイン、そしてインドへ渡った。そこで、ヒンズー教の聖者に会い、壮大な輪廻の思想の教えを受ける。Larry は本を読み、瞑想し、聖者の話を聞く。人間、もし、静穏、自制、放念、諦観、そして、心の安定、自由への渴望さえあれば、解放は達成されると教えられる。個我を滅却し、宇宙の大我と一つになることこそが Larry の疑いからの解放となることを知る。その後、Larry は周囲20マイル、誰ひとりいない丸太小屋に行くことを聖者より許され、二年間の庵室生活が終わったとき、その修業の山上で日の出を見て、法悦におそわれ、絶体なるものと合一し悟りをひらく。

Larry は下山してヨーロッパに帰って、今後は本をかき、その後アメリカに戻り、自動車修理工、トラックの運転手、どんな職業でも彼にとって問題ではなく、理想的の人生行路を見出し幸福に満ちあふれた気持である。

Gray 一家は Elliott 叔父の遺産をもらい、それを再出発の資金とし成功を収め、アメリカへ帰国。彼らはアメリカ社会において名声と財をなし満足するであろう。

(三)

Maugham の代表的な長編小説を列記すると、

Of Human Bondage (1915) *The Moon and Sixpence* (1918) *Cakes and Ale* (1930) それに *The Razor's Edge* と言えるだろう。最も興味深い共通点としては Maugham 自身が登場していることである。

The Razor's Edge の主人公は言うまでもなく、Larry であるが彼を立役者

に引きたてているのが Elliott Templeton で Larry に匹敵する程、この作品をより大衆に喜びを与え、Maugham の story teller たる地位を盤石なものにしたと言えるだろう。

Maugham は社交界やインテリ層の人々と幅広く交際をしていた両親をもち、パリで生を受け、まず最初におぼえた言葉がフランス語で両親の死後、英国へ戻ったが、医師の仕事をやめ、作家活動に入ってからフランスでの生活が続き、特に名声を得た後はパリを中心として暮し、世界の金持層の邸宅に招かれ、社交界の花形と君臨したことは確かで、まさに Elliott Templeton のそれに相似性を共有していると言えよう。

勿論、Maugham の作品の中には必ず、モデル問題がつきまとい、この Elliott Templeton について R. L. Calder は次のように述べている。

Elliott Templeton is one of Maugham's most delightful creations and has, in the years since the novel's appearance, become the most memorable figure in the story. There has been speculation about the original for Templeton, and it has been argued that, in the character of man who spurns America for the social milieu of Europe, Maugham was suggesting Henry James. Considering his opinions of James as a man and as a writer, it would not be surprising to find him using this opportunity to draw a caricature. The truth, however, lies elsewhere.

The man who was undoubtedly the basis for most of Elliott Templeton was Sir Henry ('Chips') Channon (1897-1958). Channon, an American, spent most of his life in England, became a naturalised Englishman, and for three decades was a prominent social figure. It should be noted, however, that, as with all of Maugham's characters, Channon's career and personality only suggested many aspects of Templeton; Maugham's character has a specific fictional purpose and is not intended to be a direct portrait of Channon.

A number of parallels are immediately obvious between the lives of Channon and Templeton. Channon was born in Chicago and went to Europe as a young man; Templeton is a Virginian (the American scenes, however, are set in Chicago) who becomes a social success in

Paris and London. 'Chips' lived in Paris before the First World War, and returned to that city with the American Red Cross in 1917; Templeton joins the ambulance corps in the war, and later takes a position with the Red Cross in Paris. Channon became fascinated by the Abbé Mugnier (1853–1944), a favourite of the aristocracy ('Chips' noted that 'there is always a queue of princesses waiting to see him'¹⁹), and he quickly became converted from Protestantism to Roman Catholicism. Templeton, writes Maugham, meets an abbé who specialises in ministering to the rich and aristocratic, and he is converted from being Episcopalian to Roman Catholic. That Maugham is here describing the Abbé Mugnier becomes obvious when one notes the many similarities between his description of the abbé in *The Razor's Edge* and the picture he gives of Abbé Mugnier in *Points of View*.¹¹

Channon はアメリカ人で生涯の大部分をイギリスで暮し、帰化し英国人になり、30年間、卓越した社交界の立役者になった人物である。

Elliott Templeton を検証する時に Channon を考察することは意義あることだと言えるだろう。

Elliott と Channon の経歴に差異はあるが性格は相似性を多分に含んでいる。

Channon はヨーロッパの社交界の上品さに大いに魅了させられ、アメリカ及び、アメリカ的生活を大変嫌っている。一方 Elliott は美術骨董に対する鑑賞眼をもち、如才のない社交家でヨーロッパの上流社交界で地位を得ることに汲々としている俗物である。

Robert. R. James 編 *The Diaries of Sir Henry Channon* によると Channon は根深い徹底的な俗物紳士で Templeton と同じように、その関心は紳士階級と血統にあることをあらわしている。

Sometimes I think I have an unusual character-able but trivial; I have flair, intuition, great good taste but only second rate ambition: I am far too susceptible to flattery; I hate and am uninterested in all the things most men like such as sport, business, statistics, debates, speeches, war and the werther; but I am rivetted by lust, furniture,

glamour and society and jewels. I am an excellent organiser and have a will of iron; I can only be appealed to through my vanity.²⁾

The Razor's Edge が出版され、Channon は Templeton は自分が原型だと認め、彼の日記によると、1944年、ニューヨークで Maugham と出合い、夕食をしながら、*The Razor's Edge* の中に自分をどうして入れたのかという問に対して、Maugham は Channon を三つの人物にわけ、それから三人すべてについて本を書いたと説明する。そうすると、Channon は Elliott Templeton であり主人公の Larry であり、それにもうひとりの人物であり、Channon はうれしく思い、あの本は傑作だと称賛している。

R. L. Calder はこれは注目すべき記録だが、それが Channon が理解していないことを物語っていると主張している。

Maugham は夕食を共にしながら俗物の代表的な Templeton が Channon、あなた、だとはっきり言いづらくて、Channon が三人の登場人物すべてに原型となったのだととてつもない説明をして、その場をのがれたというのが真実ではないだろうか。

とにかく Elliott Templeton は俗物ではあるが、Maugham 好みの人物で敵意のある悪玉ではなく、親切、寛大、そして教養ある人に好かれる面を多分に含蓄した主人公にも劣らぬ人物として、この作品に一つの光を放射している。

(四)

The Razor's Edge には Maugham の個人的体験、特に旅行によって得たものと彼の学問的研究をかなり利用している。

Maugham は作家のうちでも世界を広く旅行した一人と言えるだろう。

最初にドイツのハイデルベルク大学へ、そして、イタリア、スイスに行き旅の面白みを知り、スペイン、イタリアで暮しつつ、あちこち旅をし、フランスのバリーに住家をかまえる。小説家として名をなしてからも、第一次大戦中、アメリカ合衆国、サモア島、フィジー、タヒチ、ボルネオ、マラヤ、中国、

ジャワシヤム、北アフリカ、インド、そして日本にも、1959年、極東に向け六ヶ月の旅に出、一目的地として11月6日、神戸着、11月8日、横浜着、帝国ホテルに宿泊。11月17日には「丸善モーム展」に臨場し、テーブルを切っている。その後、京都へ行き、東本願寺、寂光院、三千院、平安神宮、竜安寺、金閣寺、二条城、西芳寺、三十三間堂、桂離宮等、奈良では法隆寺、春日神社、東大寺等を観て、約30日間滞在している。

Maugham にとって旅が数々の小説、戯曲の資料になっていることは明白で、*The Summing Up* の中で、小説を書くために経験を豊かにするために旅行して回ったことを次のように述べている。

When I recovered from my illness the war was over. I went to China. I went with the feelings of any traveller interested in art and curious to see what he could of the manners of a strange people whose civilisation was of great antiquity; but I went also with the notion that I must surely run across men of various sorts whose acquaintance would enlarge my experience. I did. I filled note-books with descriptions of places and persons and the stories they suggested. I became aware of the specific benefit I was capable of getting from travel; before, it had been only an instinctive feeling. This was freedom of the spirit on the one hand, and on the other, the collection of all manner of persons who might serve my purposes. After that I travelled to many countries. I journeyed over a dozen seas, in liners, in tramps, in schooners; I went by train, by car, by chair, on foot or on horseback. I kept my eyes open for character, oddness and personality I learnt very quickly when a place promised me something and then I waited till I had got it. Otherwise I passed on. I accepted every experience that came my way. When I could I travelled as comfortably as my ample means allowed, for it seemed to me merely silly to rough it for the sake of roughing it; but I do not think I ever hesitated to do anything because it was uncomfortable or dangerous.

I have never been much of a sight-seer. So much enthusiasm has been expended over the great sights of the world that I can summon up very little when I am confronted with them. I have preferred common things, a wooden house on piles nestling among fruit-trees,

the bend of a little bay lined with coconuts, or a group of bamboos by the wayside. My interest has been in men and the lives they led. I am shy of making acquaintance with strangers, but I was fortunate enough to have on my journeys a companion who had an inestimable social gift. He had an amiability of disposition that enabled him in a very short time to make friends with people in ships, clubs, bar-rooms and hotels, so that through him I was able to get into easy contact with an immense number of persons whom otherwise I should have known only from a distance.

I made acquaintance with them with just the degree of intimacy that suited me. It was an intimacy born on their side of ennui or loneliness, that withheld few secrets, but one that separation irrevocably broke. It was close because its limits were settled in advance. Looking back on that long procession I cannot think of anyone who had not something to tell me that I was glad to know. I seemed to myself to develop the sensitiveness of a photographic plate. It did not matter to me if the picture I formed was true; what mattered was that with the help of my imagination I could make of each person I met a plausible harmony. It was the most entrancing game in which I had ever engaged.³⁾

Maugham は古い文化をもつ未知の国民の生活風俗に強い好奇心をもったことがよく表われている。故にインドでの神秘的な聖者たちに興味をもち、その後、インド、あるいは中国の宗教について多くの本を読破したことは彼の母校キャンタベリーのキングス・スクールに寄贈した Maugham の図書で明白である。

数多くの Maugham のそうした本がこの作品での神学と神秘思想の資料を提供して、Larry を通じて、Maugham は東洋の神秘性、宗教を我々に訴えている。

Larry は *Of Human Bondage* の新しい世代の Phillip で精神的解放をもたらす真理を探求する Maugham の理想の代弁者であろう。

The Razor's Edge の背景はアメリカでまた、中心となる人物もアメリカ人である。Maugham は第一章の冒頭にその登場人物をどうして、英国人にする

ことができなかつたのか、ということに対して次のように述べている。

Another reason that has caused me to embark upon this work with apprehension is that the persons I have chiefly to deal with are American. It is very difficult to know people and I don't think one can ever really know any but one's own countryman. For men and women are not only themselves; they are also the region in which they were born, the city apartment or the farm in which they learnt to walk, the games they played as children, the old wives' tales they overheard, the food they ate, the schools they attended, the sports they followed, the poets they read, and the God they believed in. It is all these things that have made them what they are, and these are the things that you can't come to know by hearsay, you can only know them if you have lived them. You can only know them if you are them. And because you cannot know persons of a nation foreign to you except from observation, it is difficult to give them credibility in the pages of a book.⁴⁾

当時のアメリカは富裕と権力をもった国家になり物質的繁栄はすばらしいものがある。そこで、繁栄の裏返しに個人に加わる圧迫と制約に Maugham は目を向けたのである。

戦後の若いアメリカ人がこの作品をむさぼるように読み、Maugham のそれまでの作品で最高の売れゆきであったのはこうした物質的繁栄の達成に捧げられた生活をこの主人公 Larry が否定したことにあることは明白であろう。

(四)

Larry の精神的探求を明白にさせるために、引き立て役の人物を創り出し、その最高傑作が Elliott Templeton である。Elliott は彼の人生を外見、高貴な人たちとの社交術に浪費し、そのようなことが、彼の価値、真実である。

Larry の友人 Gray Maturin でアメリカの繁栄の代表的人物で物質的追求の野心を表わし、彼の人生の目的は財産、つまり富の追求で、これほど Larry と対照的に読者に明示している登場人物はいない。

Maugham は主人公 Larry に対して三人の女性を遭遇させている。

婚約者の Isabel は魅力的で陽気、敏感であるが Isabel も権力、財産、名誉といういつかは消滅する可能性に全信頼をおき、なお、危険な特質は所有し支配しようとする欲望である。Maugham のアメリカ女性批判を如実に Isabel を通じて痛烈に表現していると見てものをはずれていないようである。

A Writer's Notebook の中で1941年、つまり、*The Razor's Edge* の執筆にとりかかる前年に次のようにアメリカ人の男女について述べているのは Isabel の伏線として興味深いものである。

One of the things that must strike the foreigner in the United States is that whereas most men have a host of acquaintances, few have friends. They have business associates, playmates at the bridge table or on the golf links, buddies they fish or shoot or sail with, boon companions they drinks with, comrades they fight with, but that is all. Of all the people I have met in America I only know two men who are close friends. They will arrange to dine together and spend the evening in desultory conversation because they enjoy one another's society. They have no secrets from one another and each is interested in the other's concerns because they are his. Now when you consider how sociable the Americans are, how amicable and cordial, this is very strange. The only explanation I can offer myself is that the pace of life in the United States is so great that few men have time for friendship. Leisure is needed for acquaintance to deepen into intimacy. Another possible explanation is that in America when a man marries his wife engulfs him. She demands his undivided attention and she makes his home his prison.

Women's friendships everywhere are unstable. They can never give their confidence in its entirety, and their closest intimacy is tempered with reserve, misgiving and suppression of the truth.⁵⁾

Isabel は Larry を自由にあやつることができると期待していたが、アメリカでの因襲的生活を拒否されると、財力、地位、男性的能力、それに、彼女に依存している Gray Maturin と結婚するというアメリカ女性の典型として Maug-

ham は彼女を Larry にふさわしくない女性として扱っている。Maugham は自己中心型の女性として Isabel を悪玉にして Larry をより聖者に近づけようとしている意図が感知できる。

Sophie Macdonald は Larry と類似の精神をもち敏感な性格は強いものではなく、夫、子供を失い、彼女は墮落の道へと落ちていく。

Sophie と Isabel は対照的で Maugham はこの Sophie に好意を示し、Larry に結婚を決意させている。Sophie は他人を犠牲にすることなく、心やさしい女性ではあったが故に結婚を考え、彼女なら、自由を求める Larry にとってはふさわしい存在であったからである。

第三番目の女性は Suzanne Rouvier で子供をかかえて、モデルをしていた貧窮時代に Larry の親切を受ける。Larry の人柄の一面を証言する脇役の人物。*Cake and Ale* の Rosie のように Suzanne は寛大で温かく、母性的、性的な乱れは不道德というより道徳とは無関係であるが、魅力的で親切な女性で Isabel の利己主義とは全く対照的に Maugham は Rosie にいつくしみをいただいたように Suzanne に対しても親しみを十分与えている。Larry はこの Suzanne の誘惑からも聖者の如く、それを拒否するのである。

R. L. Calder は次のように言っている。

「Elliott, Isabel, Sophie, Suzanne によってあらわされる生き方の誘惑にもかかわらず、Larry は自分の真理を発見する。彼をパリからドイツに、石炭の鉱山から僧院につれだすことになった探求のあとで、その真理はインドでの経験をとおしてやってくる。そこに何年間もいたことは、彼の性格に深い影響を与え、そこでさがし求めていた精神的平静をみつけだす。Maugham がインドを Larry の啓示の根源にえらんだのは興味があり、彼がインドの宗教的信仰の核心と考えたものは重大な意味をもつ。これは特徴的なことだが、Larry の心をひきつけ、作者が強調している Vedanta 哲学の解釈は精神的解放である」⁶⁾

Calder 氏の主張は全く当を得ているし全面的に賛同の意を表したい。

The Razor's Edge の中で興味ある第六章の一節を見てみましょう。

CHAPTER SIX

(i)

I FEEL it right to warn the reader that he can very well skip this chapter without losing the thread of such story as I have to tell, since for the most part it is nothing more than the account of a conversation that I had with Larry. I should add, however, that except for this conversation I should perhaps not have thought it worth while to write this book.

(ii)

That autumn, a couple of months after Elliott's death, I spent a week in Paris on my way to England. Isabel and Gray, after their grim journey to Italy, had returned to Brittany, but were now once more settled in the apartment in the Rue St. Guillaume. She told me the details of his will. He had left a sum of money for Masses to be said for his soul in the church he had built and a further sum for its upkeep. He had bequeathed a handsome amount to the Bishop of Nice to be spent on charitable purposes.⁷⁾

上記の一節は全小説の中で一番短い文章であろう。しかも、Maugham の得意とする解説を加えているのである。

「ここで一つお断わりしておくが、なんならこの章は、飛ば読みしていただいても一向に差し支えない」とこの章はどうでもいいですよと Maugham は読者に言いつつ、「この章の大部分は、もっぱらわたしと Larry とで話したことの報告にすぎぬ。だが一言、言い添えておきたいのは、もしこの会話がなかったならば、恐らく、わたしはこの本など、とうてい書く気にはならなかったらうということである。」と Maugham の本心を吐露している。

Chapter sixこそ、この作品の真髄であるということを Maugham 独特の逆説と解することが妥当であろう。

Larry が到達した汎神論的宇宙解釈は最終目標であるが Maugham 自身、ヒンズー教を研究し、インドへ行き、自らも法悦を感知しているのだから、勿論 Larry は Maugham の心の遍歴でもある。

Maugham の意見——個人は肉体の物質の本質に対して隷属状態にある。魂は肉体の生理からはなれて独自に発展できるだろうか。

次の Larry と語り手、モームの問答は興味深い。

“But you see, I’m not only my spirit but my body, and who can decide how much I, my individual self, am conditioned by the accident of my body? Would Byron have been Byron but for his club foot, or Dostoevsky Dostoevsky without his epilepsy?”

“The Indians wouldn’t speak of an accident. They would answer that it’s your actions in previous lives that have determined your soul to inhabit an imperfect body.” Larry drummed idly on the table and, lost in thought, gazed into space. Then, with a faint smile on his lips and a reflective look in his eyes, he went on. “Has it occurred to you that transmigration is at once an explanation and a justification of the evil of the world? If the evils we suffer are the result of sins committed in our past live we can bear them with resignation and hope that if in this one we strive towards virtue our future lives will be less afflicted. But it’s easy enough to bear our own evils, all we need for that is a little manliness; what’s intolerable is the evil, often so unmerited in appearance, that befalls others. If you can persuade yourself that it is the inevitable result of the past you may pity, you may do what you can to alleviate, and you should, but you have no cause to be indignant.”⁸⁾

Larry によると、肉体の不完全さは前世の魂の不完全さに対する罰となる。輪廻は魂が純化され、再生の絆からの解放を達成するまでの生活を経験することを意味している。

Maugham は Larry が収入を放棄して、幸福を最高に感じつつ、アメリカ出发しようとするに対して彼の誠実さと善良さに感動し、究極的幸福というのは精神生活を豊かにすることにあるという信念に共感をもつ。しかし、かつては金銭を病的にまで求めたが、それは金銭そのものが目的でなくて、彼の

言う、金銭とは第六感のようなもので、これがないと五感がよく作用しない、つまり、人間の不安からの解釈と独立を保障するために求めたことを Maugham は *The Summing Up* の中で述べているが彼が物質主義者でないことを Larry を通じて訴えているようでもある。

(五)

The Razor's Edge という表題は最初の頁に引用してある Katha-Upanishad の言葉に因をなしていることは明白で、これが Larry の歩みであることも明白である。

*The sharp edge of a razor is difficult to pass over;
thus the wise say the path to Salvation is hard.*

KATHA-UPANISHAD

剃刀の鋭き刃は、渡るに難し、
賢者の日く、済度への道、またかくの
如く難しと。

カタールウパニシャッド

この作品が500万部も売れ、Maugham の作品の中でベストセラーになり大衆に大きな喜びを与えたことは疑いのない事実である。しかし、批評家、専門家からの難点がないわけではない。

特に Larry という主人公に関して、深く内面から描き切れず、人生の意義を探求する行脚の結果、Larry が到達した心境についての説明が不十分で、失敗作と判断されている。モーム研究家、越川正三氏が「サマセット・モーム小説群」の中で指摘している三点のうち、筆者も賛同する2点を紹介する。

(1) ローレンス・ダレルすなわち Larry は折りに触れて含みのありそうなことを語るが、その含みは読者には明かされない。例をあげよう。ラリーは Isabel に、“The dead look so terribly dead when they're dead.” (p.45) と語

る。これは、ラリーの行脚の動機を解き明かすカギとなるような思わせぶりなことばである。しかし、ラリーはそれ以上はなにも話さない。イザベルが “What do you mean exactly?” と問い返すけれども、彼は “Just that.” と言って話を打ち切ってしまう。だから、含みを読み取りたいと思う読者の気持は、はぐらかされてしまう。そうすると、「死人は、死んでいるときにはまったく死んでいるように見える」というのは戯言ざれごとに過ぎなくなる。語り手のモームがこの不可解なことばの含む意味を解説する役割を負うべきなのだが、そのモームがまた役割を果たしてくれない。彼も、むかしフランス兵の死骸を見たときの実感をイザベルに “I thought then just what Larry said to you: the dead look so awfully dead.” (p.49) としか言えない。これでは、解説にはなっていない。読者が失望するのは当然である。

なぜ、こんな結果になったのか。悟り的な境地に到達するまでのラリーの精神の発展に、作者モームの体験の裏づけがないからである。ネイクの “Maugham’s accounts of Hindu mysticism and of the ways of the Yogis, as seen through Larry’s eyes, is, as might be expected, woefully superficial.” (Naik: W. Somerset Maugham, p.96) という批評は、この小説の欠点を鋭く衝いたものである。ネイクは、加えて次のような批評をおこなっている。

Maugham’s emotional and spiritual limitations are clearly seen in his account of the illumination vouchsafed to Larry. It is the supreme moment of Larry’s pilgrimage, yet, as a description of a spiritual experience, it is painfully pedestrian. It does no good to tell the reader, “No words can tell the ecstasy of my bliss.” The reader must feel this ecstasy along with the hero, which, one must confess, does not happen here. (pp.96-7)

(2) ラリーはさまざまな地方を遍歴し、自分から求めて苦しい労働をしたり、多くの宗教家や哲人から話をきく。そうした体験によって彼は独自の人生観に到達し、それを実践する生活に入る。作者はその生活の現象面、たとえば質素な住居だとか汚れた服装だとか、さらには彼の奇蹟的な行為だとかについては

語り手を通して読者に伝えてくれる。しかし、そうした現象の底にある筈の悟りの心境のようなものについては、読者はほとんど知らされない。なぜラリーは Gray Maturin の頭痛を治したり、Sophie をアルコール中毒から救ったりできるのか。どのようにして、ラリーはそんな奇蹟的な術を体得したのか。作者はラリーに、“I thought I'd try to do what the old Yogi had done, and it worked. You can believe it or not, he was completely relieved of the pain.”と語らせ、続けて“I can assure you, no one was more surprised than I.”(p.237)と、秘術を体得した当人に驚かせてしまっている。こうした秘術はもちろんこのように、当人にも原理がわからないままで体得されるものなのかもしれない。しかし、万事こんな調子で片づけられてしまうと、読者は翻弄ほんろうされているような気持ちになってしまう。

もう一つ、例をあげよう。ラリーがボンで一年間暮らしたことをモームに語る場面で、モームが“*And did you get anything out of your experience, at the mine, I mean, and on the farm?*”とたずねる。そのときのラリーの様子は、読者に次のように語られる。

“Yes,” said Larry, nodding his head and smiling.

But he didn't tell me what it was and I knew him well enough by then to know that when he felt like telling you something he did, but when he didn't he would turn off questions with a cool pleasantry that made it useless to insist. (p.110)

これでは、まったく態をなさない。もしラリーがなにも打ち明けないのなら、作者の代弁者である語り手が自分の憶測としてでも語ってくれなくては困る。「それが何であるか、彼はわたしに打ち明けてはくれなかった」と言ってしまうのでは、読者のとりつく島がない。作者は、主人公に体験させた以上は、それがむなしい体験だったらむなしかった由を、なにかを得たのならなにかを得たかを読者に伝える義務を負っているのだ。

Chapter 6 は物語の進展にかかわりのない章で、ラリーの思索の発展の様子

がモームとの対話の形式で読者に紹介される。語り手に “—except for this conversation I should perhaps not have thought it worth while to write this book.” (p.233) と前置きさせていることから、作者がこの章を重視していることがわかる。ところが、読んでみると、ラリーの思索の展開がお粗末な短絡のくり返しなので読者は失望させられる。たとえば、戦友の思いがけない死に接して大きな衝撃を受けたときの回想、言わば自分を理解してもらおううえでいちばん重要な精神上の体験についての説明を、ラリーはおおむね次のような具合に進めていく。

雲の上を飛んでいるとき、自分が無限のものと一体になっている感じだった——自分の目で死人を見たとき、自分は恥かしさでいっぱいになった——なぜなら、元気だった同僚が、まるで生きてなんかいなかったようなめちゃくちゃな肉になっていたからだ——その夜は眠れなかった。自分を傷つけたのは、死体がつまらないものにみえたことが感じさせる悪ふざけみたいなものだった——帰省した。みんなは自分を働かせようとした——働くことは不毛なことのように思えた——自分の人生をなにか価値あるものにしたかった——神について考えた——この世になぜ悪があるのか、わからなかった。

以上、私はラリーの話をも忠実に要約したつもりである。要点は洩らさなかったし、順序は変えていない。これを読むと、短文と短文をつなぐダッシュのところで論理が短絡したり断ち切れてしまっていることがよくわかって頂けよう。念のために原文中から、うえの「自分の目で死人を見たとき——」から「——めちゃくちゃな肉になっていたからだ」までに相等する部分だけを引用しておこう。

“Then I saw a dead man with my own eyes. The sight filled me with shame.”

“Shame?” I exclaimed involuntarily.

“Shame, because that boy, he was only three or four years older than me, who’d had such energy and daring, who a moment before had had so much vitality, who’d been so good, was now just mangled flesh

that looked as if it had never been alive.” (p.242-3)

元気だった同僚が突然に死体になったのを見て、どうしてラリーは「恥かしさ」(shame) でいっぱいになるのだろうか。少なくともこの段落を読んだ限りでは、理解できない。このような論理の短絡あるいは断ち切れが、重要なところで続出する⁹⁾。

上記の批判はたいていの批評家の指摘する難点であろうが、世界中の読者に人気を得たのはやはり、物語作家として登場人物の性格創造よりも、技巧をこらした明快、流暢さ、あまり厳肅さはなく、ゆったりとした気持で、調子よく読んでいける気楽さに魅了させられるのであろう。

(六)

この小説の原型は1924年にかかれた戯曲「The Road Uphill」と言われている。ただし、この戯曲は出版されず、上演もされなかったものである。長年、Maugham の友人であったアメリカ人のニューヨーク大学教授、Karl G. Pfeiffer 氏によると、それは戯曲としては、失敗作であったし、後年になって、大いに活用された材料を無駄に使うことになったであろうと言及しているのは注目すべきことである。勿論、この戯曲と *The Razor's Edge* には Story において類似点は多いが、相違点もある。「The Road Up hill」には神秘主義はないし、Larry もインドには行かない。

Maugham は自分が今している仕事について、話そうと決まっていたが、この *The Razor's Edge* については自分は大いに気に入っていることを Pfeiffer 氏に語り、後にこの小説の原稿を彼に送っている。恐らく、登場人物がほとんど、アメリカ人であるので、正しい米語を使っているか指摘してくれることを期待したのであろうと Pfeiffer 氏は言及している。

Maugham はこの小説の中で自分の胸の中からすっかりはき出してしまったし、人がこの小説を好もうと好むまいとかまわないという心境であったが、好評で大いに読まれたことを素直に喜んでいる。

しかし、Maugham は意識的に物語を exciting にするために宗教的な神秘主義を入れすぎ、逆にこの小説を息苦しいものとし、批評家の苦言を受けなければならぬ作品となったことは当然であるかもしれない。

<Bibliography>

- Maugham, M. S.; *The Razor's Edge*, Heinemann, 1974.
The Partial View, Heinemann, 1954.
The Summing Up, Heinemann, 1938.
 Brophy John; *Somerset Maugham*, Longmans, Green, London, 1952.
 Calder, R. L.; *W. S. Maugham and The Quest for Freedom*, Heinemann 1972.
 Maugham, Robin; *Somerset and All the Maughams*, Greenwood Press Publishers, 1977.
 Jonas Klaus W.; *The World of Somerset Maugham*, Greenwood Press Publishers, 1972.
 Maugham Ted; *Somerset Maugham*, Jonatham Cape, 1980.
 Maugham Ted; *Maugham A Biography*, Simon and Schuster New York. 1980.
 Pfeiffer, Karl G.; *W. Somerset Maugham: A candid Portrait* London: Gollancz, 1959.
 Maugham, Robin; *Conversation with Willie*, Recollection of W. Somerset Maugham New York, Simon and Schuster, 1978.
 Burt, Forrest D.; *W. Somerset Maugham*, Twayne Publisher, Boston 1985.
 Curtis, Anthony; *Somerset Maugham (Writers & their Work)* Windsor, Berkshire, England, 1982.
 Somerset Maugham, Macmillan Publishing Co., Inc. New York. 1977.
 「サマセット・モームの全小説」 越川 正三著 南雲堂
 「モームの世界」 相良 次郎著 評論社
 「モームの研究」 中野 好夫編 英宝社
 「モーム」 上田 勤著 研究社
 「モームの二つの世界」 山川 鴻三著 京都あぼろん社
 「サマセット・モーム小説群」 越川 正三著 関西大学出版部
 講座・イギリス文学作品論 高見 幸郎著訳 英潮社
 「サマセット・モーム」
 20世紀英米文学案内19 朱牟田夏雄編 研究社
 「サマセット・モーム」

Note

- (1) *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom* (Heinemann) pp.235-236.
- (2) *The Diaries of Sir Henry Channon* p.38.
- (3) *The Summing Up* (Heinemann) pp.199-201.
- (4) *The Razor's Edge* (Heinemann) pp.2-3.
- (5) *The Partial View* (Heinemann) p.264.

- (6) W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom (Heinemann) p.247
(Translation: Teiz: Kitagawa)
- (7) The Razor's Edge (Heinemann) p.233.
- (8) *op. cit.*, p.255.
- (9) 「サマセット・モーム小説群」(関西大学出版部) pp.385-388.